

文法から文体へ

—源氏物語の敬語について—

岩 瀬 法 雲

女あさましきに、涙もいで来ぬ。この子の思ふらむ事もはしたなく
て、さすがに御文を面隠しにひろげたり。(中略)目も及ばぬ御書き
さまも、目もきりて心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひつづけて、臥
し給へり。(帚木)

またの日 小君召したれば、参るとて、御返り乞ふ。「かかる御文
見るべき人もなしと聞えよ」^Bと宣へば、(同上)

「女」というのは空蟬である。受領の妻である彼女に対しては、同
輩であるためにその動作には敬語をつけない。「いで来ぬ」「ひろげた
り」のように。ところが、A、Bのように突然敬語が見えるのはどう
したことか。これについて鈴木眼は、玉の小櫛補遺で「ここに至りて
かく此女君をあがまへいへるは、源氏君の御思ひ人となりしによりて
也」と言っている。

小君いといとほしさに、ねぶたくもあらでまどひありくを、人あや
しと見るらむと、わび給ふ。^C(同上)

ここも空蟬の動作である。

吉沢博士は対校源氏物語新釈で、「空蟬の動作に敬語を用ひたのは

こと」といって先のA、Bをあげ、「誤か。或は記者の同情の意を
示したもののか。行動を批難して敬語のある筈の人に対しても敬語を略
することが所々にある。その反対な筆法か。」⁴と言っておられる。

(1)に対して、校異源氏物語を見ると、Aについては、諸本一致して
いる。Bの方は、青表紙本系は一致しているが、河内本は「いへは」
であり、別本中国冬本もそれである。Cについては、諸本一致してい
るだけでなく、河内本には「女はわひたまふ」と、それが源氏に属す
るものでないことを表わしているくらいである。すると、先ず誤とは
考えられないことになる。

(2)記者の同情と言うなら、ここよりもっと適当な所もあったはず
である。心にもなく源氏に抱きかかえられた時、死ぬほどの辛い思い
で、「人たがへにこそ侍るめれ」というが、そんな時でも、作者は「と
いふも思の下なり」といって敬語は使っていない。どんなに相手か
ら親切に言われても、「さるかたのいふかひなきにて過くしてむと思
ひて、つれなくのみもてなしたり」とあるだけで敬語はない。そこは
「人がらのたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心

地して、さすがに折るべくもあらず」と作者の称讃する所でもある。だから同情の意でもなければ、称讃の意でもない。作中の人物に対して、そんな意志表示を最初から作者が考えているなら、「折るべくもあらず」は当然「物し絵はず」とか何とかあるはずである。

(3) 吉沢博士は源氏随致に

けしきある鳥のからごゑに鳴きたるもふくろふはこれにやとおほゆ、
D。うち思ひめぐらすにこなたかなたけどほくうとましきに人声せず、な
どてかくはかなきやどりはとりつるぞと、くやしきもやらかたなし。
右は光源氏の非行を難じたものである。
D。夕顔
と言っておられる。また、

さてもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむ事こそまばゆく
なりぬれと怖ろしく空恥かしき心地してありきなどもし給はず、女の
御為は更にもいはず、わが心地にもいとあるまじき事といふなかにも
むくつけく覚ゆれば、思ひのまゝにもえまぎれありかず。(若菜下)

右は柏木の非行を難じたものである。初には傍点で示したやうに敬語を用ひてゐるのは、柏木自ら我が非行を認識して後悔してゐる所だからであるが、後の道義観から身を責めるのでは無くして、光源氏の威光に対する気味わるさが主体となつてゐる怖れだから、禁式部はこの点にゆるすべからざる非難理由を認めただらう。

と言っておられる。果してそうだらうか。
(4)の例として、博士は同書に、先きのAとCを引用して、「右は、
ともすると動かされようとする情炎をいみじくも消しとめて、貞操を
守りつゞける人妻空蟬に共鳴した式部の意志表示である」と言われる

のである。

とここで、

寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、妹と聞き給ひ
つ。(帚木)

「妹」とは、男から見て同腹の姉妹を呼ぶ語で、「せうと」と一対をなす語である。すると、この「妹」は、作者が源氏の位置を小君に移して、殊更に女に対する心理的な距離を縮め、それによつて俄かに高まる女への関心を表現しようとするものである。「姉と聞き給ひつ」と置換えれば直ちに理解されるであらう。

童心地に、いとめでたく嬉しと思ふ。妹の君のことも、委しく問ひ
聞き給ふ(帚木)

こども同様であるが、何故「妹の君」と言つたか。ここには現在目の前に小君がいるからである。従つて、勿論、この「君」は空蟬に対する作者の褒称ではない。この時は既に女は源氏との間に誤を犯していたから。

この子も、いもうとの御心は、たわむ所なくまめだちたれば、いひ
あはせむ方なくて、人ずくなならむ折に入れ奉らむと思ふなりけり。

(空蟬)

この「御心」は、作者自身の敘述の基準を小君に移したために、必要となつたものである。この技巧で、読者は思わず知らず小君の主観に立たされて、小君と一緒にやきもきするやうな氣になる。尤も、この「御」は、青表紙本系中、池田本だけにはなく、河内本は「御心は」が「けしきは」となつており、別本中、陽明家本だけが河内本と同じであるが、「御」のある方が、読者には、何としても小君の心が切実

に感じられる。

以上のことから、前のABCに通じていえることは、その場面には常に小君がいることである。従つて空蟬に対するそれぞれの敬語は、その場面に限つては小君の主観で空蟬を見るよう、読者は要請されることになる。素直にそこを読むなら、読書は自然と小君の立場に立っていることに気がつく。事実、地の文で空蟬に敬語のつく場合は、小君と共にいる時に限られているのである。

小君かしこにいきたれば、姉君待ちうけて、いみじく宣ふ。……とて、はづかしめ給ふ。左右に苦しく思へど、かの御手習取りいでたり。さすがに取りて見給ふ。(空蟬)

島津博士はBについて、「これを聞いている小君の心意を直に又地の文に移用してある——即ちこの「宣ふ」は对小君に関する限りの正当な敬法である——のだ」と、源氏物語講話で説明されている。所で、Aについては、「河内本も同断で、本文の上に若し誤が無いとすれば、これは一寸合理的な説明に困難を感じしめる。」と言いながらも、前掲鈴木眼のことはを引き、「広道も之を支持してゐるけれども、これは苦しい観方で、牽強の嫌ひがある。」と言ひ、「強ひて言へば、やはり小君から見た観察の直叙と説明する他はあるまい。」と言つておられる。尤もであると思う。それでないと、

かのもぬけを、いかに伊勢をの海士の塩馴れてやなど思ふも、ただならず、いとよるづに乱れたり。西の君も、物恥かしき心地して、渡り給ひにけり。(空蟬)

と、軒端莪に対してまで敬語のついている理由は説明できない。こ

の敬語で、作者は直接に軒端莪を叙述しようとしなくて、空蟬の主観でしていることが分かる。そのため、あの時、自分の身代りになつてくれた相手に対する気の毒さ、すまなさと言つた女の気持が、読者にもしみじみと来るのである。

これも、青表紙本系はこの通りであるが、河内本には「給ひ」がない。別本五本中、三本はやはり「給ひ」がない。しかし、こんな所にも河内本の合理化が見えることは、前のBと同様で、河内本の性格が露呈して、別な面で大味深い問題を含んでいる。

そこで前掲のD、Eの問題であるが、Dでは、その文のすぐ前に「大方のむくむくしさたとへん方なし」とある。源氏のその気持を読者の気持にするために、作者は自分と源氏との距離を埋めようとして敬語を外したものと見られる。Eも同様である。ここでもその「むくつけ」さを柏木だけでなく読者のものとするために、敬語を外したに違いない。そうした表現効果を意図するものである。この例は源氏物語中にしばしば見られる。

鈴木眼といい、吉沢博士といい、文法学者は、文法では通じない所をも無理に通そうとした。文法にも限度がある。原則的には、この作者の作中人物に対する敬語には乱れがないのである。それが時たま見える所に文法以外の問題を考えなければならぬ。それは、文体の問題である。文法学者でない島津博士には物語を物語として受け取ろうとする純粹な鑑賞態度がある。そこに学ぶべきものがある。

玉上琢弥氏は、評釈源氏物語で、A、Bに対して

「臥したまへり」と伊予介の北の方に地の文で敬語がついた。次節にも「かかる御文見るべき人もなしときこえよとのたまへば」と敬語がある。源氏物語で地の文に敬語がつくのは上達部以上であって、女もこれに準ずるから、このばあいは例外である。この女とても自分の邸では多くの人にかしずかれる女主人公である。こういう敬語の出でくるばあいは、自邸内での女主人公としての女を、読者は感ずるのである、と思う。

と言われ、また、前の軒端萩の所では、

ただし、河内本は「わたりけり」であり、別本にもそうなっている本がある。この方が、話は簡単である。ただ「西の君」という言い方が氣になる。前に「西の御方」とあったが、それは女房が小君に言ったことばで、地の文でない。ここは地の文である。そして「西の御方」より「西の君」の方が敬意に富む。こちらがこのまゝなら、やはり問題である。「西の君も……わたりたまひにけり」と仮にする。われら源氏物語の真の読者から見れば、問題にならない身分の女が、思いがけず源氏の君のお情を頂いて、にわかにはえらくなつたつもりで、歩いてゆくこっけいなところを思うべきなのであろうか。

と言われて、両方とも叙述の基準を作者の上に固定させて考えようとしていられるが、——鈴木眼や吉沢博士もそうなのである——その場の表現効果をねらつて、作者は時々その基準を移動させることがあるのである。

翁の選択はとうとう手近い川添の娘に落ちた。……妹娘の佐代は十六で、三十男の仲平のよめとしては若すぎる。……姉娘の豊なら、も

うはたちで、おそく取るよめとしては、年齢の懸隔もはなだしいといふ程ではない。(a)

鴨外の「安井夫人」である。

「川添の家では、ひな祭の支度をしてゐた。奥の間へ、いろいろな書付をした箱をいっぱい出し散らかして、その中からお豊さんが、内裏様やら五人ばやしやら、一つ一つ取り出して、綿や吉野紙のけて置き並べてみると、妹のお佐代さんが、ちよいちよい手を出す。……その障子をあけて、長倉の御新造が顔を出した。」(b)

a は娘達のおじである翁を基準にして作者は物をいつているから呼び捨てなのである。b では娘達にはいとこの長倉の御新造を基準にしたから「さん」がつくのである。

「おとう様にお話しくださいますなら、当人を呼びまして、ここで一応聞いてみることにいたしませう。」

かう言つて母親は妹娘を呼んだ。

お佐代はおそるおそる障子をあけてはひった。(c)
母親はいった。

「あの、……仲平さんがお前のやうなものでももらつてくださることになつたら、お前きつと行くのだね。」

お佐代さんは耳まで赤くして、「はい。」と言つて、下げてゐた頭をいっそう低く下げた(d)

c は母親が基準なのである。

「おそるおそる」は母親に対してである。いとこに対してではない。d では再びいとこに基準を移した。「耳まで赤くして」という所は、いとこから見るので余計に赤くなるように思われる。

それなら作者はどこに立っているのだろうか。

「お佐代さんはどういふ女であつたか。美しい肌にも粗服をまとい、質素な仲平に仕へつゝ一生を終つた。……お佐代さんはめつたに絹物などは……お佐代さんは天に仕へて……お佐代さんは必ずや未来に……」

みんな「さん」づけである。この「さん」こそ明らかに作者のお佐代に対する称讃の意志表示である。

源氏物語の作者は、この隅外ほどでないにしても、必ずしも人物を描くのに一定の立場を固守していないことは見て来た通りである。

こうした作者の表現技巧を考えないと、次のような場合、次のような解釈も起るのである。

あなた（姫君達の部屋）に通ふべかめるすいがいの戸を、少しおしあけて見給へば、（中略）内なる人、一人は柱に少しるがくられて、琵琶を前におきて撥を手まさぐりにしつゝゐるに、雲がくれたりつる月の俄かにいと明かくさし出でたれば、兩ならでこれしても月は招きつべかりけりとて、さしのぞきたる顔にみじくらうたげに匂ひやかなるべし、そひふしたる人は、この上にかたぶきかゝりて、入る日を返へず撥こそありけれ、さまことにも思ひおよび給ふ御心かなとて、うち笑ひたるけはひ、今少しおもりかによしづきたり、（中略）げに哀れなる物の隈あるべき世なりけりと心移りぬべし（橋姫）

「心移りぬべし」は、世を厭うて道心に進んだ筈の薫であるのに、一見した女人の美の為に忽ちに心揺らぐのを嘲つたのである。また姫君中君が端近く簾をもたげて、人目をおそれずうちとけ給ふ不用意を

難じてその行動に敬語を除いたのが、圏点によって示したものである。かゝる不用意から間違ひが生じるといふ式部の訓誡は物語の随所に見られるところである。（源氏随攷）

と吉沢博士は解釈されているが、私はそうとは思わない。言うまでもなくこの場面は作者が覗き見している薫の主観に立って物を言っている所である。姫君達の動作に敬語のないのは、薫が姫君達を純粹に女として見ている証拠である。そこに並々ならぬ薫の好奇心が覗われるのである。また「心移りぬべし」も同様で、敬語を外して作者は薫との間の距離を埋めてしまつたため、読者は作者と共に薫の身近に立たされる。従つて、「心移りぬべし」が薫の問題と同時に読者の問題になつて来る。そういうことを窺つた作者の技巧なのである。物語中一連のこうした技巧は、作者の文体に属するものとしか考えられない。

竹取物語などでは、どうなっているだろうか。かぐや姫に対しては、初めからずうと敬語はないのであるが、終り近くになつて、始めて、ある人の、月のかは見るはいむこととせいしけれど、ともすればひとまにも月をみては、いみじくなき給ふ。

とある。が、すぐにまた、

七月十五日の月に出でて、せちに物思へるけしきなり。……かぐやひめいふやう「……」といふ。……かぐやひめのある所に至りて見れば、猶物思へるけしきなり。……猶月出づれば、出でゐつゝ敬き思へり。夕やみには物思はぬけしきなり。

と、敬語がなくなつて行く。ところが、

八月十五日ばかりの月にいであて、かぐやひめいといたくなき給ふ。

人目も今はつゝみ給はずなき給ふ。

と、再び現われ、すぐまた消える。消えたままずうと進んで行って、
やつと昇天の場面近くなつて、

我をいかにせよとて捨ててはのぼり給ふぞ……と、なきてふせれば、
御心まどひぬ。

と現われて、暫らく消え、

ひとりの天人いふ、「つぼなる御くすり奉れ……」とて、もてより
たれば、いささかなめ給ひて、

と現われて消えるが、今度はすくなく、

おはやけに御文奉り給ふ。……あまのは衣うちきせ奉りつれば
と、だんだんその間隔が短くなつて来る。古本中には、「つつみ給
はず」が「つつまず」、「御心」が「心」となっているものもあるが、他
は諸本一致してようである。ここにも作者の表現効果を窺つたものが
考えられるようである。

——一九五八・七・二九——